慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	エリック・ ウォルドマン著 スパルタクス団の蜂起 ; ルドルフ・ コウパー著 革命の失敗
Sub Title	The Spartacist Uprising of 1919 and the Crisis of the German Socialist Movement, by Eric Waldman ; Failure of a Revolution, by Rudolf Coper
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1961
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.54, No.1 (1961. 1) ,p.62(62)- 66(66)
JaLC DOI	10.14991/001.19610101-0062
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19610101-0062

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評

エリック・ウォルドマン著
『スパルタクス団の蜂起』
(Eric Waldman; The Spartacist Uprising of 1919 and the Crisis of the German Socialist Movement: A Study of the Relation of Political Theory and Party Practice, 1958, Marquette University Press. xii+pp. 248)

ルドルフ・コウパー著
『革命の失敗』
(Rudolf Coper; Failure of a Revolution, Germany in 1918-1919, 1955. Cambridge Univ. Press. xi+pp. 294)

一九一八年から一九年にかけての革命の失敗から、これにつづくワイマール体制の崩壊、そしてついにあの悲劇的な第二次世界大戦の序幕となったナチスの政権掌握にいたるまでのドイツ現代史は、民主主義の擁護が緊急の課題となっているわれわれにとって、まことに教訓的であるといわなければならない。再び悲劇を繰り返さないことを決心したわれわれではあったが、最近の政治社会状勢のな

かで、にわかに勢力をもりかえした反動勢力の抬頭に、一抹の不安を感じない者はなかろう。ファシズムへの途は、決してすぎ去った悪夢ではなく、もし国民がこれと闘おうとする勇気を失うならば、いつでも開かれるものであることを忘れてはならない。この意味においてわれわれ社会科学の研究に志す者が、ドイツ現代史に熾烈な関心を示し、そこから、われわれが直面しつつある問題を解きほぐすための武器を摑みとろうと努力するのは当然である。いやしくも社会科学者たる者は、その研究対象が何であれ、客観的な態度でこれにのぞみ、感情や党派性を排除しなければならないことはいうまでもないが、しかしそれにもかかわらず、その意識の底に、鋭敏な時代感覚、歴史的な構想力をもたなくてはならない。これらのものを欠くならば、その理論がいかに高度のものであり、その論理がいかに厳密であろうとも、それは灰色の、冷いものとなるであろうし、いわゆる「腕のいい職人」と選ぶところがなくなるであろう。何故なら、社会科学とは、すぐれて理論的且つ歴史的なものであるからである。

ドイツ革命史にかんする研究は、東西両ドイツとも非常に盛んであり、その研究動向については別の機会にふれたいと思うが、いまここに紹介を試みようとするのは、イギリスおよびアメリカ合衆国の研究者による二者であり、それぞれ特色をもっていると思ったので、とりあげたのである。

まずウォルドマンの「スパルタクス団の蜂起」であるが、著者は、オーストリアのウィーン大学およびジョージ・ワシントン大学を卒業して、そこで学位をうけ、現在マークェット大学の政治学の助教授をしている人である。著者は、その青年時代の一時期をオーストリアで過した関係からか、ドイツの文献にもひろく通じ、これらを参照し、スパルタクス団の蜂起を頂点とするドイツ革命の全過程をきわめて生き生きと描写している。

第一部　スパルタクス団の出現
　一、第一次世界大戦前のドイツ社会民主党内部の左翼
　二、第一次世界大戦のドイツ社会主義運動への衝撃
第二部　十一月革命とスパルタクス団
　三、十一月革命の衝撃
　四、革命の終結対継続
　五、「スパルタクス団の蜂起」――ベルリンにおける内戦
　六、革命の回顧、結語、要約

となっている。本書の特徴は、ドイツ社会民主党左派の性格分析からはじめて、カール・リープクネヒト、ローザ・ルクセンブルク、クララ・ツェトキンおよびフランツ・メーリングなどの左派が、第一次世界大戦以前、社会主義鎮圧法撤廃後、いかに急速に発展したかについて論じ、とくに、右派および中央派と結びついた労働組合主義者を敵としてたたかい、一九〇五年の第一次ロシア革命によって、戦術的に大きな影響をうけたことを指摘し、さらにスパルタクスの戦術的欠陥からくる蜂起の失敗について克明にふれていることである。「ローザ・ルクセンブルクは、原則の問題として、改革（reform）に反対しなかった。彼女は、改革のための闘いは、労働者を組織し訓練する手段として用いられることを理解した。彼女の立場は、『改革か革命か』ではなくして、『改革と革命と』であった。彼女にとって重要なことは、日常闘争が、窮極の目的と有機的に結びついているということであった。」(p. 17) とのべているのは正しい。そのほか、ローザの理論の中核ともいうべき大衆ストライキ、大衆の蜂起の自然発生性の強調、あるいは、レーニンの中央集権主義にたいする反対 (pp. 20-23)、社会民主党右派の指導者の社会主義から愛国主義への転換などが追求されている。この書を通じて著者は、資料をして語らしめる立場をもって一貫しており、この点は評価されなければならないが、逆に、客観性を重んずる余り、安易な叙述形式に流れるという欠陥をもっている。しかし分析的な批判がみられないわけではない。たとえば、ドイツ社会民主党の最大の裏切りといわれる多数派社会民主主義者の、第一次世界大戦を前にしての主戦論への転換の秘密として、㈠国民各層にみなぎる盲目的愛国主義、㈡社会民主党の非合法化への恐怖、㈢労働組合指導者の民族主義的偏向 (p. 34) などをあげているのは興味深い。革命に反対する右翼社会民主主義者にたいし、独立社会民主党からぬけ出てドイツ共産党を結成したスパルタクス団、左翼急進主義者が対立している過程のなかから生れてくる革命的職場委員 (Revolutionäre Obleute) にたいしても正しい評価をあたえている。平明な文章で非常に読み易く、通読すると著者の

ドイツ革命への熾烈な研究心をしみじみと感じさせる力作であると思うが、さきにも指摘したように分析的でなく、かなり広範囲の文献渉猟にもかかわらずあまりにも物語り的であり、とくにスパルタクスの蜂起を頂点とするドイツ革命全体にたいする評価が、きわめて貧弱である。とりわけ、ドイツ革命の発展を、ロシア革命の影響から無関係であるとして、きり離して論じられているのは、問題がある。もしそうだとしたならば、最近のドイツ民主共和国における「ロシア革命のドイツに及ぼした影響」にかんする精力的な研究をどのように評価するかという疑問もおこるし、それをローザ主義とレーニン主義との対立としてとらえるにしても、この両者の関係が理論的に把握されなければならない。こういう点がこの著者の限界をよく示している。しかし、英文で書かれた研究書として、「スパルタクスの蜂起」を対象としたものは少なく、その意味では一読に値しよう。

これに対照的なのは、コウパーの「革命の失敗」である。著者は、青年時代にドイツ革命を身をもって体験した人らしく、序文につぎのように書いている。「革命は異常な事件である。革命を通じて生きた人は、それを忘れることはできない。一九一八年のドイツ革命の事件は、他の三つの大きな事件、すなわち二つの世界大戦とナチス革命の事件よりも、さらに生き生きと印象づけられている。後者、つまりナチスの政権掌握についていえば、それがはじまった直後、ドイツから逃れた。第一次世界大戦についていえば、闘うには余りにも若すぎたし、またそれがよかったのだ……。第二次大戦についていえば、わたしは年をとりすぎていて闘うことはできなかった。ある人は、われわれの世代を、失われた世代と呼んだが、わたしは同意しない」と。

このように述懐したのち、彼は本書を書くのに利用した資料の選択にあたって、つぎのようにのべているのは、著者の考え方を示していて面白い。「しかしわたくしは、いかなる事実にかんしても、記憶には頼らなかったし、すべての人が知っているような事実に頼らなかった。またわたくしは、その当時のドイツの新聞やその他のいかなる新聞にも頼らなかった……。その代りにわたくしは、すぐれたドイツの年代的な記録の蓄積を用いた……」。新聞の資料的価値を真向から否定してしまう著者の立場も、彼がドイツ革命の勃発と挫折そして反革命の勝利を見聞し、その革命から反革命への急速な変貌の過程のなかで新聞がどのような役割を果したかという役割だけをみるならば、よく理解できるのであるが、しかし一顧の価値もないように考えてしまうのは、少し公式的すぎはしないだろうか。ともあれ、著者が事実を公平に客観的に書こうと努力していることは事実で、これは本書を通読してよく感じられる。しかし残念だと思うことは、それほど資料的な厳密性を強調する著者が、巻末にかなりくわしい参考文献をあげているとはいえ、文中にほとんど脚注がみられず、従って出典がまったく明らかにされていないことである。事件の推移が、きわめて生き生きと描かれ、引用も豊富であることはいうまでもないが、誰がどこで発言したのか、よくわからないような点が少なくないのは惜しまれる。

前おきはこの程度にして、本書の内容の検討にうつろう。本書は、つぎの二九節から成っている。序文、一、降伏、二、革命、三、社会主義者、四、共謀、五、共和国、六、独立派、七、スパルタクス団の人々、八、ショップ・スチュアート、九、「エリート」、一〇、権力、一一、合法性、一二、各州独立主義、一三、外交、一四、「市民」、一五、あけぼの、一六、協議会、一七、士官、一八、水兵、一九、共産主義者、二〇、同胞殺戮、二一、軍国主義、二二、「傭兵」、二三、悪夢、二四、合図、二五、大虐殺、二六、獣性、二七、シーザー、二八、謝肉祭、二九、正常な状態、である。

このように目次からも明らかなように、革命の担い手となるべき労働者、兵士、革命的オプロイテ、革命的社会主義者の間の相互関係と同時に、そのそれぞれについて立体的な考察を試みていることである。とりわけ一九一八年一一月九日、社会民主党の指導者シャイデマンが、ドイツ国会の窓から、共和国を宣言してから、彼が革命勢力におされて社会主義への路線を歩みはじめるかのような姿勢をとり、とくにエーベルトが人民委員となってからの、その絶対主義勢力（＝ユンカー、軍人、プリンス・マックスによって代表される）との密談および野合などについての叙述は、きわめて興味深い。すなわち、下からの革命勢力としての労兵会議（Workers' and sailors' council）が、革命的オプロイテや独立社会民主党に代って権力を掌握しようとするのにたいし、エーベルトは参謀本部および官僚制との強い結びつきおよび支持によって、この労兵会議の権限を奪おうと画策する。そしてそのためには、労兵会議の執行委員会を有名無実なものとすることの必要上、一種の陰謀によって、つまりエーベルトの政府みずから社会主義共和国の方向へ志向するかのような素振りによって、実質的に労兵会議の執行委員会の権限を政府の官僚機構のなかにおさめようとした右翼社会民主主義者の政策、この点の叙述はなかなか鋭いものがみられる（pp. 111-113）。

その意味では、さきのウォルドマンの労作が、ともすれば解説的におちいりがちであるのに反し、下からの権力掌握をめざす革命的勢力にたいして、右翼社会民主主義が、どのように対処したか、その反動的反革命的性格を見事に分析してみせてくれる。本書を読んで感じられることは、一九一八年のドイツ革命は、ロシア革命という意味における革命ではなく、カイゼルの軍事的崩壊にともなう既存権力体制の瓦解の過程のなかで、偶然に社会民主党に政権がおちてきたという感を深くする。このなかで新しい社会体制への展望やプログラムをまったく欠いていた状態にあった社会民主党が、むしろ反動勢力の尖兵として、旧秩序にはげしい郷愁を感じたのは、偶然ではない。この点は、すでにシュトムダールが、「ヨーロッパ労働運動の悲劇」において明快に分析したところであった。

筆者は、ドイツ労働運動史の研究に志してまだ日が浅いが、本書は、すでに指摘したような欠点があるにもかかわらず、複雑な政治

的諸関係のなかで躍動する指導者の立場を客観的に批判し、軍国主義ドイツの崩壊後、ドイツ革命の失敗、その後の短い幕合いの期間に登場したワイマール体制が、何故にヒットラーの第三帝国への途を開くに至ったか、この問題を、すでにこの一九一八年から一九年にかけての変革の過程の歪曲化のなかに、もっとも公式的でない形において求めていることは注目されねばならない。

（飯田　鼎）

P・ホグリーフ著
『トマス・モアをめぐる人々』
"The Sir Thomas More Circle
A program of ideas and their impact
on secular drama"
by Pearl Hogrefe, 1959

I

トマス・モアとその友人たちを、単にヒューマニストの群れとしてではなく、著者ホグリーフのように Sir Thomas More Circle とか T. More Group としてとらえることには、積極的な便宜がある。つまり大体一五〇〇年を境にして、イギリス・ルネサンスには大きな変化がみられ、それ以前はイタリアに遊学してきた Grocyn, Linacre, Colet らによって、漸くイギリスにルネサンスの火が点じられた時代であり、その時モアはそれら先輩の影響をまともに受けるのである。だが一五〇〇年以後になると、英国内でルネサンスの感化を受けたモアたちの世代が、一人前に成長してヒューマニストとして活躍することになる。いわばルネサンスがイギリスに深く根ざし勢よく芽生えてくるのである。「モアをめぐる人々」とは、このようなイギリス・ルネサンスの局面を的確に示しているものと言えよう。

更に、このグループに属する人々の活動をモアの没年である一五三五年頃までに限って考えているわけであるが、モアの死とともにルネサンスのはなやかさは消え失せたとみてよいので、その意味では「モアをめぐる人々」というとらえかたは好都合である。しかし、モア自身の作品の上にも、「ユトーピア」を頂点として、以後ルネサンス的色彩は影をひそめ、宗教改革にともなう宗教論争が多くなり、必ずしも同日に論じがたい。このことは他の人々にも言えることであるが、著者ホグリーフはむしろ意識的にその面の変化を切りすてようとするふしがある。それは「モアをめぐる人々」をルネサンス中心に考えるにはよいとしても、社会的変革に対応する彼等の姿をとらえるには、大きな欠点となっていることは争えない。

要するに本書は、モアを中心とするイギリス・ルネサンスの解明に主題をおくものであるが、従来の研究が概ねトマス・モアだけ

とりあげるにとどまり、その周辺への探究がなおざりにされがちであった。たとえば「ユトーピア」に描かれたモアの社会改革案も、必ずしも当時のヒューマニストにとってかけはなれたものではなく、むしろ同時代者のいだいていた思想との関連のなかに理解されねばならないものである。ホグリーフの労作はモアとその友人たちの共通の理念を明らかにしようと試みたものである。

II

本書の内容は、第一部「改革案の諸理念」(Ideas: The Program of Reform) と第二部「それら諸理念の一般戯曲への影響」(The Impact of their Ideas on Secular Drama) から成り立つ。しかも各部とも同名の六章に分れているが、その章別がいわばその諸理念を示しているから、次に掲げる。

Nature and the law of nature
The bases of true nobility
Religious reform
Law and government
Education in general
Education of women: love, marriage

即ち第一部では、これらの諸分野で、モアやその仲間たちが受けついだ伝統のなかで、いかに働きかけ、どのような作品を残したか、を吟味することによって、彼等のいだいた改革への理念をつきとめようとする。第二部では、今みいだされた諸理念が、モア・グループの人たちの手になる戯曲のなかに、どのように現われているかを明らかにしようとするものである。

ところで、これら理念相互の関係はどうなっているのであろうか。第一に重要な概念として、自然と自然法の思想がとりあげられる。モア・グループの人々にとって、それはすべての思想の基礎をなすものであった。彼等の判断や行動の基準は、そこに求められた。だがそれにもかかわらず、彼等の言う Nature の意味は、多様で決して単一ではなかった。古代や中世の伝統をそのままに受けついでもいたし、敢えて独自な意味を主張するものでもなかった。ある時は宇宙の理法を意味し、ある時は神の秩序を意味した。また人間に内在する理性を示すものでもあったが、一方では物理的な自然界をさす言葉でもあった。概念としては一向に新しい発展をとらなかったが、古い権威ではなく Nature を行動の指針として尊重したことによって、彼等の関心も Nature の語義のように多角的にひろがっていった。そしてそのような自然の法を認識する主体として、あらためて人間の尊厳や意志の自由の意義が確認された。

かくして、人間の真実の高貴さは、自然の法を学ぶことによってのみかち得られることになる。家柄や財産のいかんは、人間の尊さとは無関係なものとなる。そこに貴族主義の排斥と、学問や教育によって何人も真実の高貴さを実現することができるという信念をみいだすのである。それ故、世の指導者たるものの資格として、真実